

思い出の動物たち（9）

～動物園生活、はじまりの頃～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～名誉園長）



2025年4月末、50年の動物園生活にピリオドを打たせていただいた。動物が飼い慣らされた囲いから脱出すると、自由を感じる一方で環境の急変で不安になるように、私は今、動物園の柵から出て解放感を得たが、寂しさ、所在なさもあり複雑な心境だ。多くの人が経験する心理だろうが、柵内生活が長過ぎたせいか思いは強い。折角の初体験だから、それを楽しんでもみたい。

年のせいか柵内での経験、思い出がいろいろと浮かび上がって来る。なぜか50年前の採用時の思い出が度々登場し、それが意外に鮮明だ。

1975年5月1日、私はイレギュラーな形で動物園に採用された。動物園ができた73年に採用された獣医さんが一年後の冬には辞めてしまい、獣医師が不在となったため緊急公募があった。大学卒業が間近に迫る頃、就職が曖昧だった私に親から電話があり、その情報を知った。動物園の仕事は私の頭にはなく、偶然の出会いだった。大袈裟だが、私の動物園との関わりは、今思えば運命的とも言えそう。4月の市長面接を経て、5月1日付けで秋田市職員に採用となり、動物園配属が決まったのだ。

初出勤日のことは今でも鮮明だ。連休直前の5月1日、人事課経由で公園課に赴いた。公園課長から動物園への配属辞令と訓話めいた話があった。辞令はとにかく話の内容はほとんど思い出せない。その後、控えていた老園長が、私に動物園の車を市役所玄関に待たせているからそこに来るように告げ、一足先に退席した。

玄関に行くと、老園長は既に運転手とともに車にいた。車は荷台がボックス型の2人乗り軽トラックで、私の席はなかった。困った顔をした私を見て老園長は車から降り、ガラガラと荷台扉を開け、中に乗るように告げた。かくして私は貨物同様の扱いで動物園に運搬されたのだった。当時はまだ大らかな時代だった。

私の動物園体験は、子どもの頃の千秋公園児童動物園までであった。それ以来、動物園には行ったことがなく、仕事のイメージは皆無だった。だから、貨物扱いながら、車の中ではどこか新大森山動物園にワクワク感を抱いていた。

園到着後、老園長からやはり訓話めいた話と、事務机を挟んだ対面での不思議な昼食があった。家庭的な昼食は覚えているが、話の内容はやはり思い出せない。

午後からは飼育員による施設案内があった。作業用通路を進みながら飼育員が鉄格子付きの小窓を開け、外を見せてくれた。檻の展示場をウロウロ歩くクマ、その先には動物を見て楽しむ観客の顔も見て取れた。ヒョウ展示場では小窓を開けた瞬間、吐息を感じさせる近さで口を開けたヒョウに威嚇され、たじろいだのを覚えている。さらに進むと、猛獣とは異なる特別な意図で喧しく騒ぎ立てるものがいて、チンパンジーだと教えられた。知能が高い分、猛獣とは違う危険な動物であることも。

総合動物舎という猛獣類の収容施設内の一角に、私の仕事場となる動物の診療施設があった。児童動物園のイメージしかない私には、そこは



堅固な要塞のようでもあり、家畜とは全く異質な匂い、唸り声なども聞こえる不気味な雰囲気空間であった。

鉄格子で囲われた室には机や白い医療棚、診療台らしきものがあつたが、どこか殺風景な印象だった。医療棚には雑然と置かれたメスやハサミなどの外科器具、その傍には解剖器具も一緒だった。薬品棚にはカンフルのアンブルや注射器、さらに赤チンのビンなどもあつたが、薄汚れた脱脂綿からゴキブリが出て来たのには驚いた。机の上にはビニールに覆われた小さな単眼顕微鏡が一台だけあつた。猛獣と隣り合った、実践的でも機能的でもない診療施設に、学卒新米獣医師ながら、「これは大変だ」と内心想った。

「医療検査とか、診療とか、前の獣医さんはどのようにしていましたか」と聞くと、「動物園の獣医は解剖が主な仕事だから…」と言われ、追い打ちをかけられた気分であつた。それが当時の現実、大森山の始まりの時代だった。

かくして、私の獣医師事始め、動物園での初日は、診療とかという空気感に乏しい、動物園の現状を知るところから始まったのだった。貨物的に運ばれた新米獣医は、大きなカルチャーショックを受け一日を終えたのだったが、同時に、前の獣医さんが一年足らずで辞めていった理由がわかるような気もした。

連休明けに実務が始まった。それは飼育員としての現場の仕事からであつた。獣医師であるためには動物を知らずして病気を治すこともできないから、動物飼育には何の抵抗もなかったし、むしろ至極当然のことだと思った。動物と接する飼育員の仕事は、怖さを感じ、緊張の連続でもあつたが、小さい時から動物と普通に関わっていたから、多様な動物と接するうちに、珍しさを超え、生命の不思議さに魅了されるようになり、飼育の仕事にワクワク感を覚え、毎日が新鮮であつた。

そんな動物飼育の仕事が続いていたある日、仕事が終わりにかけた夕刻、飼育員が飼料袋（紙の米袋のようなもの）に入れられた動物の死体を持ってきた。「サルが死んでいた」と、細かな病状や経過もあまり告げぬままに預けられた。その時、「獣医は解剖が主な仕事だから」の意味が飲み込めた。

飼育の仕事が続く中、獣医師らしい最初の仕事が（病理）解剖だったのだ。それがサルであつたのは動物園らしかったが、慣れない私にはサルの死体は不気味だった。大学時代に皆で行った牛や馬の解剖とは大違いだった。皆が帰った後の夜、緊張が強られる動物舎で独りで行ったサルの解剖は、恐さと不安、不気味さも入り混じった経験であつたことを今でも思い出す。

私の動物園生活は、こんな状態で始まり50年が続いた。「思えば遠くへ来たもんだ」という海援隊の歌があつたが、今の心境はそれに似ていて感慨深い。

長く同じ仕事を続けてこられた人には、それぞれに、それなりの思いなどがある。自分がどうだったか今思い返してみると、幾つかの理由があつたように思う。

新卒獣医師は、他と比較する情報もなく、あまり不満も持たず、ひたすら何とかしなければと無我夢中だったのだろう。そんな時代にいたのだ。逆に、先進的な獣医医療環境での獣医師体験をしていたら、すぐに辞めていたのかもしれない。

物事をあまり深刻に考えない性格であり、職場の仲間と楽しく交わりながら、何もないところから創り出す喜びを体験できたことも大きい。

だが、最大の理由は、動物の姿形や仕草に魅せられ続けたこと、さらに動物との楽しい出会いを提供する動物園の仕事が、人々の、家族の幸せそうな笑顔につながることを、来園者に何度も何度も教えてもらったからだろうと思う。動物園は私を育ててくれた素敵な場だったのだ。